



大阪大学のEthnography Labは、フィールドワークと質的研究の教育・研究、国際交流を目的として人間科学研究科に設置された組織です。Labでは、人類学、社会学、共生学の教員が中心になって

- (1) 学部と大学院におけるエスノグラフィ教育の企画と開発
- (2) エスノグラフィを用いて他分野とコラボレーションする実験的なプロジェクト
- (3) トロント大学を中心とした海外の大学と連携した国際集中講義の開催
- (4) エスノグラフィを軸にした文理融合研究

などを行っています。Ethnography Labは、社会学・人間学系、共生学系とともに、エスノグラフィについての体系的な大学院カリキュラムを提供しています。2019年度からはLabがコーディネートして、エスノグラフィについての初級、中級、上級の三科目を開講しています。

Ethnography Labの試みは、トロント大学（University of Toronto）の人類学科でJoshua Barkerさんを中心にして始まり、現在コンコルディア大学（Concordia University）と大阪大学の三箇所を設置されています。それぞれのラボは独立してエスノグラフィをめぐる実験的な試みを行いつつ緩やかに協働しています。

大阪大学のEthnography Labは、リーディング大学院「未来共生イノベーター」プロジェクトでの大学トロント大学とのコラボレーションをきっかけに2018年に設立されました。2019年からは、人類学研究室が提供する授業と社会調査士カリキュラムの一部を融合することで、修士課程レベルで一貫したエスノグラフィ教育カリキュラムを提供しています。

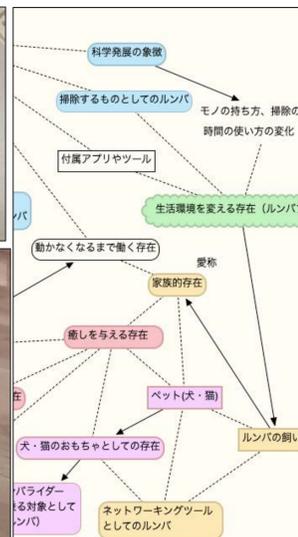
## エスノグラフィとは？

「人々について誌したもの」という意味の英語で、人類学など社会科学で用いられてきた調査研究の手法のこと。特徴は、統計データや数理的なモデルではなく実際に現地の人々の活動についてフィールドワークやインタビュー、綿密なフィールドノートの記述から明らかにする、ということです。長い時間をかけて現地に心身を浸しきり、その社会や文化や様々な実践について理解する点が何よりも重視されています。また、調査の結果は必ずしもアカデミズムの内側だけではなく、対象となった人々を含む広い社会に資することが目指されます。そのため、エスノグラフィは、古典的には論文や長大なモノグラフでしたが、現在は写真や映像作品、より文学・詩的な要素を盛り込んだストーリーテリング、そしてモノづくりなど、多岐に開かれています。このように現場に密接に関わり、成果をパブリックに活かすことができるため、社会科学のみならず、ビジネスや教育、デザインの現場とのコラボレーションも行われています。

## Field School

## Critical Making

## Digital Ethnography



### トロント大学との合同サマースクール

#### Landscapes of Cohabitation

More-than-human Entanglements in the Anthropocene

April 29 – May 6, 2019, Osaka

This summer school was the culmination of a five year long collaboration between the Department of Anthropology at the University of Toronto and the Faculty of Human Sciences at Osaka University. The seminar aimed to put contemporary Western debates on more-than-human politics in conversation with grassroots movements in Japan by focusing on the notion of *kyōsei*, which has come to epitomize a new form of politics that cuts across the division of nature and culture in contemporary Japan.

FIELDTRIP 1: Precarity and *kyōsei* (Kamagasaki, Osaka)

FIELDTRIP 2: River infrastructures (Ibaraki, Osaka)

FIELDTRIP 3: Humans and monkeys (Arashiyama, Kyoto)

The three field trips in Osaka and Kyoto, and the long conversations among students of both universities that followed these trips were designed to elucidate a new form of politics that highlights forms of relatedness between indigenous and marginalized worlds and industrial civil society.

### 京北の森とものづくりのエコロジー

一般社団法人パースペクティブと共同で、京都市北部、京北地域における森林と持続可能なものづくりに関する調査プロジェクト。京北の森から木が切り出され、製材され、地域の内外を流通するプロセスとの中で営まれる人々のものづくりの物語を明らかにしようというものです。

森から消費者へと流れていく木材のフローと、それを製材したり加工したりする人々の営みがある。それは、人々と森、経済・生活と環境をどのように結びつけているのだろうか？この木材の流れに媒介された人々の行為の連鎖を描き出すために、Ethnography Labでは、エスノグラフィと、マテリアル・フロー分析を結びつけた新たな研究手法を開発してきました。

プロジェクト・パートナーのパースペクティブは、京北の森林資源の循環的な活用を促進し、それを通して京北の木材と密接に結びついてきた京都の工芸の発展に貢献することを目指しています。このビジョンに協力するため、京都工芸繊維大学の津田和俊研究室と協力しています。京北の木材の流れとものづくりの営みとそれをめぐる物語の絡み合いを描き出し、京北の地にあらたな「ものづくりのエコロジー」が誕生する可能性を探っていきます。



### なぜルンバは「かわいい」？

#### デジタル・エスノグラフィからのアプローチ

ルンバが、ソーシャルメディア上では「かわいい」存在になっている。家庭用掃除ロボットとして開発され、可愛さとは無縁に思える…。にもかかわらず、なぜ「かわいい」のか？ ----2020年からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、それまでのエスノグラフィを行ってきた条件は根本的に変化しました。しかしEthnography Labでは、現代の社会生活の多くがオンラインとオフラインの複雑な組み合わせである重要な事実に着目して、デジタル・エスノグラフィの手法を開発してきました。

そこで当時学部4年生の宮本実侑さんのプロジェクトでは、むしろTwitterというフィールドだからこそ見えてくる、ユーザーにとってのルンバの「かわいさ」に着目し、現代的な生活における掃除ロボットと人間の関係性についての記述に取り組みました。ここでは、ツイートをテキストデータとして抽出し、そのデータの読み込みと分析から、ソーシャルメディア上で盛んに発信されているルンバの「かわいさ」の要素を明らかにしています。“飼い主”の手を借りなければならず、部屋を「ルンバブル」にする。そのような相互作用とかわいさ、そしてソーシャルメディアから、現代のデジタル的な社会生活が見えてきます。

**Members** 森田敦郎（カリキュラム・コーディネーター、科学技術と文化）、川端亮（高度な質的データ分析、現代社会学）、鈴木和歌奈（エスノグラフィの執筆方法、科学技術と文化）、モハーチ ゲルゲイ（フィールド調査法、コンフリクトと共生）、杉田映理（フィールド調査法、国際協力学）、神崎隼人（RA、科学技術と文化）



ホームページ：<http://ethnography.hus.osaka-u.ac.jp/>